

2021 年度

国内研究、海外研修、在外研究の報告

武蔵野美術大学 言語文化研究室 教授 小澤智子

国内研究、海外研修(フルブライト奨学金による海外渡航と滞在)、在外研究について、以下のとおり報告する。

I. 研究調査の概要

今回の研究調査のおもなテーマは、次の 2 つである。①1840 年代から 1860 年代における横浜外国人居留地を中心とした人びとの移動・移住の文化史の研究、②「占領下日本」における人びとの移動・移住の文化史の研究。いずれもさまざまな境界線を超える人・もの・情報の移動性(モビリティ)に注目する。期間中に、上記の 2 つのテーマにかかわる調査に着手したものの、多数の訪問先において関連する内容の資料を収集するなかで、各テーマを広げることになった。この結果、新しい研究会を発足させつつ、新しいプロジェクトの構想(太平洋を横断する船上をめぐるプロジェクトや、第二次世界大戦後の「支援物資」活動に関するプロジェクトなど)にも取り組むことになった。

国内外の図書館、アーカイブス、美術館や博物館において調査を実施するなかで、各施設の司書や学芸員などの専門家との情報交換や交流にたいへん助けられた。訪問先では、ほかの関係者や研究者などを紹介していただき、資料収集や資料検証をより充実させられるようなネットワークづくりに時間を割くこともできた。「フルブライター」として学術的活動を行っていることも、人脈を広げる重要なきっかけとなった。今後も、今回の出会いで培ったつながりを大事にしていきたい。期間中、多くの研究会などの学術会合に参加できたことは、研究調査を進めるうえでも、極めて重要であった。

海外研修および在外研究の受け入れ機関であったスミソニアン・インスティテューションのアメリカ歴史博物館(National Museum of American History, Smithsonian Institution)に所属できたことも、たいへん意義深いと感じた。同機関の関係者にお世話になり、感謝している。大きな研究機関に所属することにより、図書館など関連施設における充実した資料・データベースへのアクセス権限の活用が可能となり、想定していたよりも多種多様な資料収集が可能となった。

各テーマについて、先行研究を検証しつつ、歴史的な資料の収集と分析を行っている。ナショナリズム、ジェンダー、人種・エスニシティ、宗教、言語、立場や階級をはじめとする社会的な構築物を分析対象としつつ、人・もの・情報の移動性に注目することによって浮上する人びとの多様な経験や力関係(パワー・ポリティックス)に光を当てようとする試みである。研究調査の成果の一部は、随時、研究会で口頭発表しつつ、論文や研究ノートのかたちにもまとめられている。さらに、成果の一部は、本学の授業(科目「文化講義」など)において、学生とも共有している。授業では、期間中に収集した資料(一次資料と二次資料)を活用しながら、19 世紀から 20 世紀における横浜・東京(江戸)を起点とした人・もの・情報の移動性について講義している。

充実した期間を過ごしたものの、新型コロナ感染症拡大の影響により、渡航滞在で入手できなかった資料については、あらためて出張計画をつくり、資料収集したいと考えている。また、今回の滞在中、感染症の影響で閉館したままであったアメリカ合衆国国務省の外交史博物館や内務省の歴史博物館は、いずれ必ず訪問したいと思う。

II. 計画と期間

国内研究 期間:2021年4月1日(木)–2021年9月29日(水)

海外研修 期間:2021年9月30日(木)–2022年2月28日(月)、アメリカ合衆国滞

在外研究 期間:2022年3月1日(火)–2022年3月16日(水)、アメリカ合衆国滞

国内研究 期間:2022年3月17日(木)–2022年3月31日(木)

本来1年間を海外で過ごす予定であったが、新型コロナ感染症拡大の影響により、結果的に、国内研究や在外研究を組み合わせるかたちとなった。期間中、国内外の図書館、アーカイブス、美術館、博物館などでの資料の閲覧と収集、さらにはデジタル資料を活用した。渡航したアメリカ合衆国(以下、アメリカ)においても、感染症にかかわる制限により、期待していたような自由な現地調査を行うことができなかった。アメリカ滞在中のほとんどの期間、公文書館(U.S. National Archives and Records Administration)をはじめ、受け入れ機関のスミソニアン・インスティテューションのアメリカ歴史博物館(National Museum of American History, Smithsonian Institution)では、原則、入構(オフィスやスタッフの作業場への立ち入り)が制限されていた。このため、現地での資料収集は、当初の予定の半分にも到達しなかった。厳しい制限がありながらも、訪問できた別の図書館やアーカイブスでは、珍しい資料を調査でき、多数の研究テーマについて、日本にいたときには想像できなかったような学術的な進展をみることができた。海外での調査期間は、当初の計画の半分ほどであったが、思いがけないかたちでの収穫があった。

III. 国内研究、海外研修、在外研究の詳細

1. 国内研究

①期間:2021年4月1日(木)–9月29日(水)および2022年3月17日(木)–3月31日(木)

②国内研究期間における4月1日から4月11日までの10日以外は、まん延防止等重点措置下または緊急事態宣言下となり、テレワーク中心となった。(まん延防止等重点措置4月12日–4月25日、緊急事態宣言4月25日–6月21日、まん延防止等重点措置6月21日–7月12日、緊急事態宣言7月12日–9月30日。)

加えて、アメリカより帰国後の3月17日–21日まで、まん延防止等重点措置の対象期間で

あった。

③調査実施

基本的に、津田塾大学図書館のみに通うことができ、20 世紀前半の歴史的資料の収集を行った。

④研究会の立ち上げ、研究プロジェクト発足

19 世紀から 20 世紀における環太平洋地域を中心とした人・もの・情報の「移動」と「モラル」「道徳性」に焦点をしぼり、人びとの経験を歴史学的に検証する研究会(Mobility & Morals 研究会)を発足させた。研究会のメンバーは、歴史学、ジェンダー研究、移民・移住研究、余暇研究、アメリカ研究を専門とする研究者である。同研究会は、年間を通じて、月 2 回以上のペースで研究会を実施した。活動は、現在も継続している。

4 月に収集した資料を用いて、研究会メンバーとともに、新しい研究プロジェクト 3 件分の計画をつくった。このうち 2 件は、科研プロジェクトとして採択された。

2. 海外研修と在外研究

①海外研修 期間:2021 年 9 月 30 日(木)–2022 年 2 月 28 日(月)、アメリカ滞在

在外研究 期間:2022 年 3 月 1 日(火)–2022 年 3 月 16 日(水)、アメリカ滞在

②海外研修の期間は、フルブライト奨学金(研究者)を活用した。アメリカでは、おもにワシントン DC に居住し、ボストン出張(本学の助成)およびフィラデルフィアでの調査を行った。

アメリカ滞在中のおもな経験は、以下のとおりである。訪問した順に紹介する。訪問先の受け入れ体制や費用などは、当時のものを記す。

●定期的な打ち合わせ

アメリカでの受け入れ機関(スミソニアン・インスティテューションのアメリカ歴史博物館、National Museum of American History, Smithsonian Institution、図1)の学芸員との打ち合わせを定期的に行った。スミソニアン関係者の大半は、原則テレワーク中であり、施設内への立ち入りが厳しく制限されていた。対面業務への復活の見通しはたっていなかった。結局、2022 年 3 月下旬でも、テレワーク中心であり、対面業務にはほとんど戻らなかった。一般見学者として、博物館の展示エリアには入れたが、最後まで、割り当てられた個人オフィスに入室できなかった。

図1

●見学した Smithsonian Institution の美術館、博物館は、以下のとおりである。予約制ではないが、一部、コロナ感染症拡大の影響により、開室と閉室を繰り返していた。入館料は、無料。

National Museum of American History

National Museum of Asian Art
Freer Gallery
Smithsonian Institution Building (Castle)
Postal Museum
Museum of Natural History
National Gallery of Art
Hirshhorn Museum and Sculpture Garden

●ボランティア

コロナ感染症関連のインスタレーション(social practice
場所:National Mall

内容:ホワイトハウスのまえに広がる芝生の空間(National Mall という)につくられたインスタレーション(全米のコロナ感染症死者 70 万人以上を追悼する目的で、約 70 万本の白い旗を立てた)の撤去作業に、ボランティアとして参加した。このインスタレーションは、DC の中心地である公共空間におけるコロナ関連の作品あり、作家らによる政治的な活動の一環として位置づけられる。なお、第一弾となる前回は 20 万人の死者の存在をドナルド・トランプ前大統領に訴える活動であった。

作品名:*In America: Remember*

アーティスト:Suzanne Brennan Firstenberg (social practice artist)



図2 ワシントン DC のナショナル・モール

●Washington, DC の Dumbarton Oaks Museum & Garden



ハーバード大学の管轄下にある博物館(図3)と豪邸・庭園を見学した。同館には、ビザンチンの造形物・建造物および南北アメリカが植民地化される以前の文化(Pre-Columbian Studies of Mexico, Central America, and Andean South America)の研究所が併設されている。予約制。庭園への入場料は、7ドル。

図3 Dumbarton Oaks Museum の入り口

●Washington, DC の White House Visitor's Center

同センター(図4)では、ホワイトハウス関連の写真や食器・インテリア品を中心とした歴史の展示を見学した。一時期、ホワイトハウスに複数の奴隷がいたことなども説明されていた。9.11以降は、ホワイトハウスに一般見学者が直接訪問することが厳しくなっている。同センターは、予約は不要。入場料は無料。



図4

●Washington, DC の The Phillips Collection



アメリカ初の近代美術館として 1921 年に開館した。日本出身の作家の作品も、展示されていた。
予約制。入館料は、教員 10ドル。

図5 住宅地にある The Phillips Collection

●Washington, DC の Smithsonian's National Zoo & Conservation Biology Institute

スミソニアンフェローに対する身分調査の一環として、動物園(図6)内の警察署において指紋登録を行った。さまざまな書類を提出したうえで、2週間後に審査結果を受け、身分証明書が発行された。以前は予約なく手続きを行えたが、完全に予約制となっていた。混雑しており、なかなか予約がとれなかった。



図6

●Washington, DC の Library of Congress (議会図書館)



同館の司書と打ち合わせを行いつつ、日本では入手できない資料を中心に調査した。入館は、半日単位の予約制である。建物は、多数(図7, 8)点在する。

左、図7 Jefferson building
右、図8 Madison building

●Washington, DC の National Museum of American Jewish Military History



同館では、キリスト教中心のアメリカ国家制度やアメリカ軍組織におけるユダヤ系の人びとの活動や主張がわかりやすく展示されていた。世界大戦で亡くなった兵士の母親の視点による解説が、印象に残った。

予約は不要ある。入館料は無料。

図9 National Museum of American Jewish Military History 入口

●Mount Vernon, Virginia に所在する初代大統領の邸宅の博物館

George Washington's Mount Vernon



図10 ワシントン大統領の邸宅の門



図11 表示パネル

博物館 George Washington's Mount Vernon は、ワシントン DC 市街地より、電車とバスを乗り継いで約 1 時間強のところに位置する。博物館となっている木製の邸宅は、新古典主義ジョージア調建築様式であり、地所はバージニア州のポトマック川の堤にある。同施設は、1960 年にアメリカ合衆国国定歴史建造物に指定され、また国家歴史登録財にも登録された。現在、マウントバーノン婦人協会による信託によって所有、維持されている。当時、この邸宅に 300 人以上の奴隷がいたことも、展示や敷地内の墓地の解説に含まれている。予約制。入場料は、大人 28 ドル。

●Alexandria, Virginia

Alexandria History Museum at the Lyceum と Torpedo Factory Art Center

ワシントン DC 市街地から電車で約 45 分の Alexandria, Virginia にある同市の歴史博物館 Alexandria History Museum at the Lyceum(図12)を見学した。入場料は、同市の住民以外は 3 ドル。



図12 歴史博物館



図13 Torpedo Factory Art Center

また、アート・センター(図13)には、多数の芸術家の工房とショップが集結されていたため、非常におもしろかった。芸術家にとって重要な活動拠点の一つであろう、と思う。同センターは、以前、魚雷工場であったという。

●Washington, DC の National Museum of the US Navy

博物館 National Museum of the US Navy(図14)を見学した。さまざまな戦艦とそれらの「活躍」ぶりを中心に、海軍史をたどる内容であった。太平洋戦争のコーナーでは、日本兵士のヘルメットや武器なども、展示されていた。大西洋沿岸にあるワシントンDCの海事的な位置とその意味に、注意が向いた。

入場料は無料であるが、同館は軍事基地に所在するため、入構のための特別な手続きがある。入館料は無料。



図14

●Massachusetts 出張

①期間:2021年10月28日(木)から4泊5日

②まとめ:本出張では、17世紀にイギリス出身のキリスト教系(清教徒)「白人」が、北アメリカに上陸し、「最初の植民地」(学術的には、「最初の植民地」ではないと考えられている)を設けた場所であるプリムスに加え、その後、「新大陸」の文化と政治の中心地として繁栄したボストン市とその近郊を訪問することができた。さらに、18世紀に日本から漂流した「萬次郎」の足跡を確認でき、萬次郎関連の資料を入手できた。萬次郎とは、1841年、現在の土佐市から仲間とともに漁船で出航したところ、太平洋で遭難し、伊豆諸島にある無人島の一つである鳥島に漂着後、この島でわずかな溜水と海藻や海鳥を口にしながら約140日間を生き延び、鳥島に立ち寄ったアメリカの捕鯨船に救出された人物である。漂流、救出、帰還をめぐる移動性を検証するうえで、歴史的に重要な人物である。

新型コロナウイルス感染症対策の一環として、美術館・博物館・図書館は、一時閉館していたが、2021年7月から9月の間に、基本的に完全予約制(入場者制限あり)で営業を再開していた。美術館などの施設を訪問する際は、予約の手続きを原則オンラインで行い、入場時にスマホで予約バーコードやQRコードを提示する。アメリカにおける航空会社のフライトの手配と搭乗手続きについても、基本的に予約、発券、提示が完全にオンラインで行われることが想定されている。紙媒体での発券は、原則、廃止されている。今回、空港内の航空会社のオフィスのカウンターで事情を説明したうえで、紙媒体の搭乗券を作成してもらった。アメリカで調査するにあたり、ネット環境やメールのアクセスが整っていることが大前提となり、スマホがなければ、もはや身動きがとれない状況であることに驚いた。

2021年10月28日(木)

ワシントン DC(Ronald Reagan National Airport)からボストン市(Boston Logan International Airport)へ飛行機で移動した。アメリカでは、新型コロナウイルス感染症のワクチンを接種した者は、飛行機の移動が基本的に認められている状況であった。しかし、空港では接種証明の確認は、一切なかった。搭乗者のマスク着用は、義務化されている。

空港からホテルへ直行し、チェックイン後、ボストン茶会事件船と博物館(Boston Tea Party Ships & Museum、図15、16)を見学した。



図15 ボストン茶会事件船と博物館



図16

「ボストン茶会事件船と博物館」では、18世紀半ばの歴史的な事件に関する限られた活字資

料をもとに、船を再現し、当時の衣装を身にまとった者が「茶会事件」を「実況中継」するかたちで歴史をおもしろく「再現」している。いわゆる「アクティブ・ラーニング」を取り入れており、見学者にセリフを発言させたりし、見学者を歴史的な物語に参加させている。入館料は、大人 31.95 ドル。

10 月 29 日(金)

午前、ボストンから車で約 1 時間のところにあるプリマスへ移動し、ダウンタウン地区とプリマス・プランテーション(Plimoth Patuxet Museums、図17, 18)を見学した。「プリマス・プランテーション」とは、イギリス出身の入植者が、「新大陸」に上陸後、住まいとした小屋や入植者の日常生活の様子を再現した屋外テーマパークである。近年の傾向であろうが、イギリスや「白人」の活動のみに目を向けるのではなく、現地の先住民や環境問題にも触れる展示手法が興味深い。当日、近くの小学生が集団(数クラス)で社会科見学として訪れていた。屋外の展示が多く、コロナ時代にも適した遠足先のようなのである。入場料は、大人 42.50 ドル。



図17 プリマス・プランテーションの受付所



図18 当時の住まいを再現した光景



午後、ボストン市内のボストン美術館(Museum of Fine Arts Boston、図19)を見学した。同館の所蔵品は 50 万点を数え、「古代」、「ヨーロッパ」、「アジア、オセアニア、アフリカ」、「アメリカ」、「現代」、「版画、素描、写真」、「染織、衣装」および「楽器」の 8 部門に区分されているようである。入館料は大人 27 ドル。

図19 ボストン美術館は巨大であり、半日では展示を観きれない。

10 月 30 日(土)

ボストンから車で約 1 時間半の港町フェアヘブンとニューベッドフォードへ移動し、萬次郎ゆかりの地で調査を行った。萬次郎は、アメリカ人船長ウィリアム・ホイットフィールドとともに、1843 年に船長の自宅がある港町に到着し、船長宅でしばらく生活を送った。萬次郎は、アメリ

カにおいて英語、数学、科学、航海術、政治思想などを学んだ後、24歳のときに「鎖国」下日本へ帰国した。アメリカの事情に詳しい萬次郎は、その後、日本の「開国」に「貢献」した。萬次郎のことを最初の「民間外交官」と位置づける研究もある(伊藤重行「ジョン・万次郎と外交官としての歴史的役割」『経営学論集』第18巻第4号(2006年):39-54)。

現在、萬次郎が滞在した家、通った学校や教会などが、一つの史跡ツアー(The Manjiro Trail)



として、「ホイットフィールド・万次郎友好会(Whitfield-Manjiro Friendship Society, Inc.)」によって整備管理されている。ツアーは、車で廻った。訪問先は、以下のとおりである。

・ミリセント図書館:萬次郎関連の資料(文書、写真や品物)が展示されている。二次資料の文献も充実している。萬次郎をきっかけに構築されてきた日米間の交流事業にかかわる展示品もある。

・萬次郎が通った小学校:当時の建物がそのまま残っており、内装(机やストーブなど)が再現されている。

・萬次郎の家庭教師の家:現在、居住者がいるため、なかには入れない。学校の担任が家庭教師として学校外でも萬次郎の学びに携わっていたという。

図20 ミリセント図書館(Millicent Library)

図21 ホイットフィールド・万次郎友好記念館の正面。

人物は、同館の代表のルーニー氏。



・萬次郎が航海術を学んだ学校:建物が残っている。

・ホイットフィールド船長一家が通った教会:現在も、教会として活用されている。

・ホイットフィールド・万次郎友好記念館:ホイットフィールド船長の家が博物館となっている。萬次郎が実際に滞在した家である。その後、この家は増築された(新しい1階が作られた)が、現在の2階と3階(当時の1階と2階)には、萬次郎も歩いた床や使った暖炉など、内装の一部がそのまま残っている。萬次郎は、この家のみではなく、ホイットフィールド船長の別荘でも生活を送ったことがわかっている。

ホイットフィールド・万次郎友好記念館の代表であるジェラルド・ルーニー(Gerald Rooney)氏との面談を行った。ルー

ニー氏から聞き取ったおもな内容は、以下のとおりである。

- ・同地域の歴史を保存する活動の状況
- ・日本との交流事業の展開

- ・昭仁皇太子と美智子皇太子妃をはじめとする訪問者の様子
- ・ホイットフィールド家の子孫と萬次郎の子孫との交流(それぞれ5代目がいる)
- ・同地域の名家(Delano 家:大統領となる Franklin Delano Roosevelt や Ulysses S. Grant の先祖)などがいかに萬次郎やその記憶づくりにかかわったかなど。

実際に訪問したことにより、萬次郎関連の先行研究では、ほとんど触れられていないこと(ホイットフィールド船長一家が通っていた教会に、一家とともに萬次郎が参列したところ、萬次郎を「黒人席」(人種隔離)へ移すように言われことに抵抗したホイットフィールド一家が、より寛容な教会へ移ったことなど)を知った。現地では、萬次郎の登場により、人種としての「アジア人」「日本人」の社会的な位置づけが議論されていたわけである。これは、アメリカの人種論を検討するうえで、とても興味深い事例である。萬次郎をめぐる人種論については、今後の分析課題としたい。



図22 捕鯨博物館



図23 同館内

ニューベッドフォードにある捕鯨博物館(New Bedford Whaling Museum、図22, 23)を見学した。

ホイットフィールド船長の航海日記や手紙、萬次郎が描いた捕鯨船の絵なども展示されていた。入館料は、大人 18ドル。

10月31日(日)

ボストンから鉄道で約2時間のセーラムへ移動し、ピーボディ・エセックス博物館(Peabody Essex Museum、図24)を中心に見学した。同博物館は、1799年に船長や船荷監督人らによって東インド海員協会として設立された。国際的な貿易の歴史が長い地域に存在する同博物館には、長崎の出島にいた外国人が、日本の職人につくさせた工芸品なども多く所蔵されている。また、同博物館では、イン・ユー・タン・ハウス(Yin Yu Tang house)を公開している。イン・ユー・タン・ハウスは19世紀の中国安徽省にあった商家の家屋で、元の場所からセーラムに移されたものである。

当日、ハロウィーンであったため、「魔女狩り」の地でもあるセーラムには多くの魔女姿の人がいた。ボストン市内から数駅しか離れていないものの、鉄道(ディーゼル)の運行数は一日10本のみ(週末)であった。入館料は、大人20ドル。



図24 ピーボディ・エセックス博物館



11月1日(月)

午前、ボストン市からワシントン DC へ飛行機で移動した。予定よりも 1 時間以上フライトが遅れた。

図25 北部からボストン市街に近づくときの車窓からの光景。写真はないが、ボストン周辺には、原子力発電所が 2 か所あるそうだ。そのうち一か所は未稼働とのこと。

ボストンでの資料収集について

訪問した各施設においてさまざまな資料を接写した。

- DVD *The Whitfield-Manjiro Friendship House*
- DVD *Manjiro Trail*
- 仲濱京『ジョン万次郎——日米両国の友好の原点』(富山房インターナショナル、2014 年)。
- Gerry Rooney, “Hello Brother”: *The World from a Motor Scooter, 1964-1967* (Xlibris Corporation, 2009)など。

●College Park, Maryland

University of Maryland の Hornbake Library

図26 University of Maryland の大学図書館の一つ Hornbake Library



University of Maryland の Hornbake Library 所蔵の Prange Collection を閲覧した。ワシントン DC 市街地より電車とバスで約 1 時間のところにある。司書にお世話になった。

Prange Collection とは、占領期に日本で出版、発行、発表しようとしたすべての図書・雑誌・新聞・ポスター・野球カードをはじめとする娯楽品などの活字資料が、基本的に、1 部ずつ所蔵されている資料コレクションである。

占領下日本では、原則的に、進駐軍にすべての発行物を 2 部提出することが義務づけられ、進駐軍(基本的にアメリカ軍)が、2 部に赤を入れつつ、公開の有無や条件を決め、1 部を提出者

に戻し、1 部を手元に残した。アメリカ軍側に残った 1 部を、プランゲという人物がすべて University of Maryland に運んだとのこと。つまり、占領期の発行物(原稿や校正刷りも含む)が網羅的に残っている。

・Prange Collection には、上記のものほかに、当時、日本にいたアメリカ人(軍人または民間人)が集めた資料や撮った写真・動画も含まれる。

・日本軍の「図書館」にあったもので、おそらくプランゲ自身が選択した図書・雑誌・記念刊行物類の資料も含まれる。

・東京の国会図書館にある Prange Collection の資料は、全資料のごく一部である。

・Prange Collection の検索サイトは、以下。ただし、この検索対象になっていない資料も、まだ大量にあるという。<https://www.lib.umd.edu/prange>

●Washington, DC 郊外の Glenstone Museum



個人(Emily & Mitch Rales)によって設置・運営されている美術館 Glenstone Museum(屋外の彫刻やインスタレーションも含む)を見学した。立地、施設、展示内容など、あらゆる側面からみても、贅沢の極みであった。ワシントン DC 市街地から車で 40 分くらいのところ。入場料は無料。完全予約制であるが、教員は優先される。

図27

●Annapolis, Maryland



Annapolis は、ワシントン DC 市街地より、車で 45 分ほどのところにある街である。アメリカ海軍およびアメリカ海兵隊の士官学校の所在地である。

図28 US Naval Academy 門



Annapolis では、US Naval Academy のキャンパスを訪問し、構内の US Naval Museum(図29)を見学した。入場料は無料であるが、軍事施設内に所在するため、入構手続きが必要である。

図29 US Naval Museum

Annapolis 中心地にある歴史博物館 Museum of Historic Annapolis(図30)も見学した。

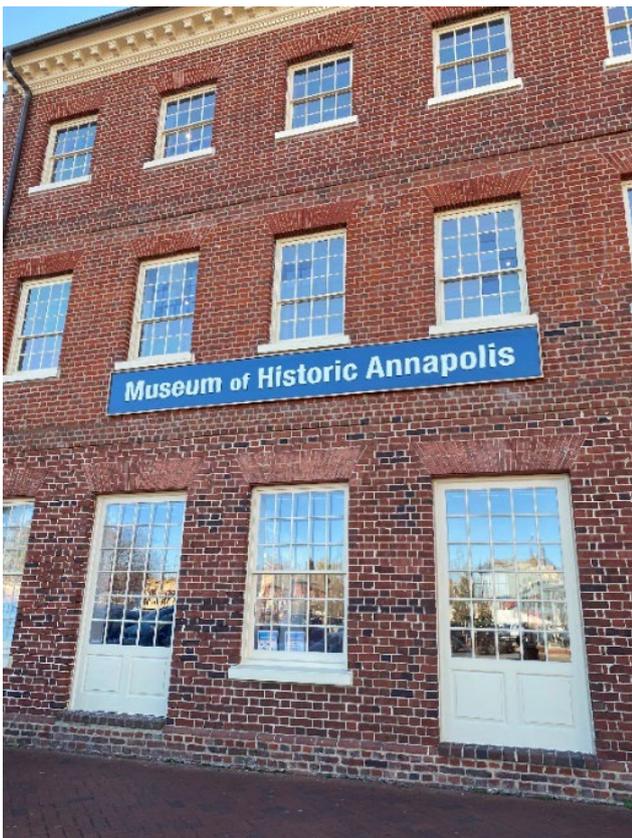


図30

同館では、Annapolis を中心とした地域における奴隷貿易や奴隷制度をめぐる多様な人びとの言動が紹介されている。全般的に人種主義を批判する内容であるが、同地域における奴隷への依存がいかに大きなものであったかを伝える展示であった。

●Philadelphia, Pennsylvania



Historical Society of Pennsylvania (図31) が所蔵する “American Friends Service Committee, Clothing Committee, Japanese American Relocation Centers Card Files, 1943-1945” を調査した。フィラデルフィアは、ワシントン DC の中央駅 (Union Station) より Amtrak 列車で約 1 時間 45 分のところにある街である。同館で、調査(接写)した資料の様式は、カードであった。このカードには、第二次世界大戦中に、アメリカにおいて日本人移民・日系人が強制収容された収容所への「支援」の情報が記載されている。写真のように、計4つの箱に大量のカードが詰まっていた。ここで接写したカード資料を手がかりに、新しい研究プロジェクトを構想した。

図31 Historical Society of Pennsylvania の入り口



図32

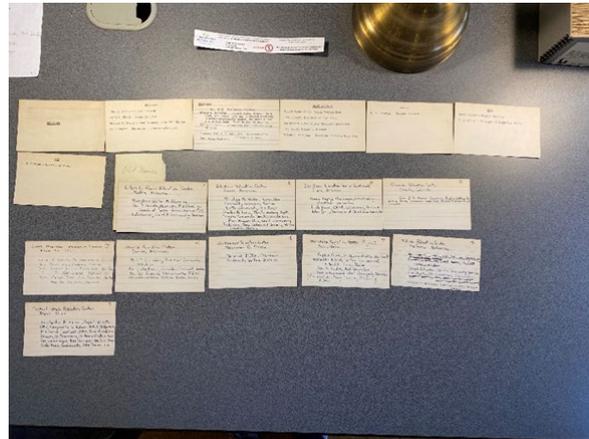


図33

●ワシントン DC 市内にある President Lincoln’s Cottage Museum を見学した。軍事基地に所在する

ため、入構のチェックがある。同館は、リンカーン大統領が頻繁に滞在した邸宅の博物館である。この敷地には、南北戦争をはじめ、歴史的に数々の戦争で負傷した兵士が収容されてきた療養所が併設されている。同所は、現在、退役軍人(独り者)の集合住宅地となっている。展示空間の一部は、家族を亡くした悲しさとそのケア(グリーフ・ケア)を扱っていて、興味深かった。リンカーン一家が子供を亡くしたことを背景にし、家族の悲しみを普遍化する展示が含まれていた。予約制。入場料は 15 ドル。



図34 入口

●Washington, DC の

Textile Museum, George Washington University

George Washington University 管轄の Textile Museum(図35)を見学した。売店にあたる Artisans Gallery では、日本人作家が制作した染織物(かすりなど)も、販売されていた。3 階にわたる広い空間に、南アジアやインドの染物文化を中心とした展示があり、ワークショップ用の空間も充実していた。入場料は無料。



図35

●Philadelphia, Pennsylvania

フィラデルフィアの American Friends Service Committee (AFSC) Archives(図36, 37)で調査を行った。AFSC とは、クエーカー教徒らが中心となり、組織運営されている慈善活動団体である。同団体は、国内外においてさまざまな支援活動を行ってきた。日系アメリカ人や日本への支援も、含まれる。同組織の活動について、新しい研究プロジェクトへ取り入れる。

場所: Friends Center, 1501 Cherry Street, Philadelphia, PA 19102 tel: +1 215.241.7044

スキャン: 無料(USB 持参する必要あり)。

コピー:「一枚 20 セント」



図36 Friends Center 正面



図37 資料室は地下にある

スキャンした資料

1942 年－1947 年、同組織の議事録、アメリカ国内の収容所関連、占領下日本への支援(ララ物資)の概要を中心に。

接写したアルバム資料

ボックス「AFSC Albums, Japan, 1950's, 1960's (Includes Japan-Korea Work Camp album)」内の、①アルバム全頁、②スクラップ・ブックの前半を接写した。同ボックス内、このほか2種類の冊子があった。

①アルバム “To American Friends Service Committee-with Thanks-, From Japan Friends Service Committee, December 1969”

②スクラップ・ブック “Thank-you Letter from Japan 1951”

まとめ:

- (1) AFSC の各種委員会などの「議事録」の重要性を確認した。同組織には、年毎に、さまざまな会議の議事録が保管されている。たとえば、1942 年の Minutes ボックスのなかに、AFSC Minutes 1942, National Japanese-American Student Relocation Council – Executive Com. や AFSC Minutes 1942, Orient Committee のフォルダーがあり、そのなかに議事録などが収められている。議事録に委員会の Secretary のサインが確認できることから、議事録は回覧したうえで、次の委員会で公式に承認されていたと思われる。議事録からは、同組織の全体的な活動内容を把握することができ、歴史的な資料として貴重である。
- (2) AFSC の体系化された運営を確認した。Committee, Sub-committee をはじめとする会議体や関係者の配属などは、組織として(つまり、既存の会議での審議を経て)決定されている様子が、議事録から垣間見える。同組織は、非常に体系化された運営を行っているようである。Foreign Service Executive Committee の議事録をみると、委員会での承認事項や Executive Board での決定事項を再確認している。

●Philadelphia, Pennsylvania

Independence Seaport Museum



図38

ワシントン DC から列車とタクシーで約 2 時間のところにあるフィラデルフィアの海事博物館(図38)を見学した。「海がない州」だと考えていたペンシルベニアには、大西洋に通じる運河があり、植民地時代より、多くの船が行き来していたという。大勢の移民や奴隷が到着した場所である。入場料は、大人 18 ドル。同館では、奴隷制とその影響についての解説に力が入っていた。また、海軍・海兵隊の歴史的な「貢献」が強調されていた。

●Washington, DC

National Archives and Records Administration



図39



図40

本来、National Archives(公文書館、図39, 40)で資料収集をしたかったが、感染症の影響で閉室と予約制がつづき、調整がつかなかった。当初、19世紀の海事史や漂流者に関する資料を閲覧する計画であったが、同施設の展示スペースを見学するのみとなった。予約制。入館料は無料。

●Washington, DC

Daughters of the American Revolution



図41



図42

125年以上前に組織された「女性団体」の博物館(図41, 42)を訪問した。同団体は、モットーの“God, Home, and Country”に象徴されるように、歴史的な「愛国婦人団体」である。同団体の博物館では、女性の活動と「家庭生活」「家庭づくり」を強く結びつけた内容が展示されていた。また、各州の地域性が強調されている構成が興味深かった。入館料は無料。

●Washington, DC

United States Navy Memorial

博物館 United States Navy Memorial は、アメリカ海軍の功績と歴史をたたえる内容の展示を行っている。同館の敷地内には、興味深いパネル(図43)や記念碑(図44)が並んでいる。入館料は無料。



図43 同館は奥の建物内



図44 海軍は「商業目的で日本を開国した」という記念碑

●College Park, Maryland

US National Archives and Records Administration at College Park



図45 NARA, College Park 正面



図46 右側の建物 NARA, DC の前からシャトル

ワシントンDC市街から電車とバスまたはシャトルバスで約1時間のところにある College Park の National Archives へ調査に行った。感染症の影響で、滞在中、ほぼ閉館していたが、3月中旬から少しずつ予約制での開館が始まった。ようやく1日分の予約がとれた。訪問当日までに、オンラインの利用研修を受ける必要がある。



図47

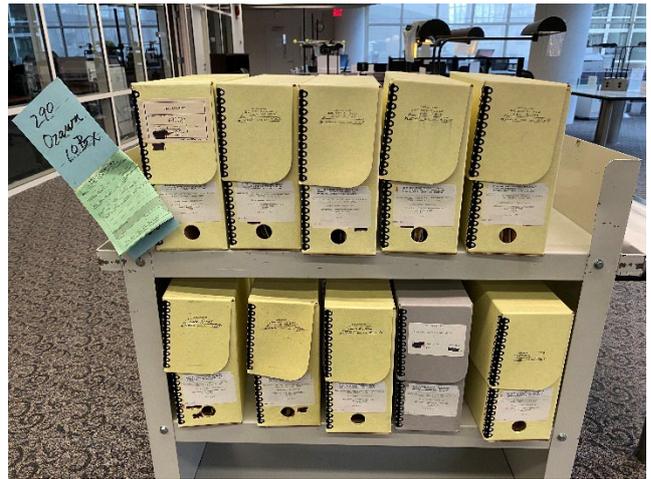


図48

「米軍ハウス」と一般に称される第二次世界大戦後の占領下日本につくられたGHQ/SCAP関係者の住まいに関する資料を中心に調査した(図47, 48)。「米軍ハウス」の歴史的な調査は、フルブライト奨学金プロジェクトのテーマである。アメリカ軍の記録が、多く残っている。入手できた資料について、今後、丁寧に読み解きたい。



図49

作業するデスク。パソコン機材を持ち込める。スマホで接写する場合、スマホを固定する補助装置を借りることができる。複写(コピー機)利用費は高いため、スマホでの接写を行った。

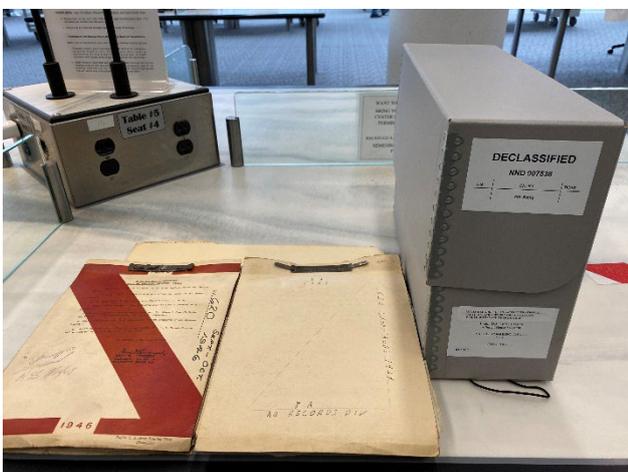
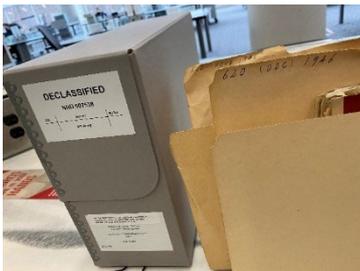


図50 資料は、ボックス内のファイルや封筒に収められている。

Box NND907538, RG 338 Records of U.S. Army Operational, Tactical, and Support Organizations (World War II and Thereafter), Eighth U.S. Army, 1944-56, Adjutant General Section, General Correspondence 1946, 600.96 to 620 (Box 307).



☒51

Box NND907538, RG 338 Records of U.S. Army Operational, Tactical, and Support Organizations (World War II and Thereafter), Eighth U.S. Army, 1944-56, Adjutant General Section, General Correspondence 1946, 600.96 to 620 (Box 308).



☒52

Box General Correspondence Classified 1947, 617-620, folder “620 Troop & Dependent Housing, January-July.”



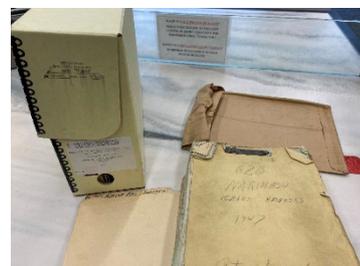
☒53

Box NND907538, RG 338 Records of U.S. Army Operational, Tactical, and Support Organizations (World War II and Thereafter), Eighth U.S. Army, 1944-56, Adjutant General Section, General Correspondence 1949, 611-710 (Box 455).



☒54

NND 795004, Box Records of General Headquarters, FEC, SCAP, and UNC, Engineer Section, General Correspondence Classified, 1947, 620 (Box 85).



☒55

NND795004, Box RG 554 Records of General HQ, Far East Command, Supreme Commander Allied Powers, and United Nations Command, Records of General Headquarters, FEC, SCAP, and UNC, Engineer Section, General Correspondence Classified 1947, 629 (Box 86).



図56

NND795004, Box RG 554 Records of General HQ, Far East Command, Supreme Commander Allied Powers, and United Nations Command, Records of General Headquarters, FEC, SCAP, and UNC, Engineer Section, General Correspondence Classified 1947, 620-631 (Box 87).

●Washington, DC の National Building Museum



同博物館(図57)では、ワシントン DC 市内とその周辺の都市計画や住まいについて展示されていた。人種主義の観点で展示内容を分析すると、同地域の人びとの日常が、その者の人種・エスニシティや階級・立場によって大きく異なっていたであろうことがわかる。予約は不要。入館料は、一般 10ドル。

図57

●Washington, DC の The United States Holocaust Memorial Museum



同館(図58)のテーマは、ユダヤ人に対する迫害、差別主義、ジェノサイドに関する内容である。写真やパネルが非常に多く、インパクトのある展示であった。予約制。入場料は無料。

図58

●Washington, DC 市内には、多くの公立図書館がある。コロナ禍のもと、地元の図書館は、PCR検査の拠点、簡易検査キットの配布所としての役割も果たしていた。訪問した図書館には、以下が含まれる。



図59 Cleveland Park Library



図60 Mount Pleasant Branch Library

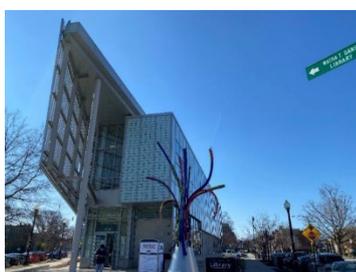


図61 Shaw (Watha T. Daniel) Library



図62 West End Library



図63 Petworth Library

IV. 参加した学術会合および論文と研究ノート発表

● 2021 年度は、以下のように、多数の研究会や学会の会合にかかわることができた(敬称略)。

参加

スミソニアン協会と明治大学の共催講演

日時:4月6日(火)10:00-12:00

場所:Zoom ミーティング

参加

Organization of American Historians 学会

日時:4月15日(木)–18日(日) Zoom と on-demand

会合:年次大会

口頭発表

Food and Foodways 勉協会第2回

日時:4月23日(金)10:00-12:15

場所:Zoom ミーティング

主催者:赤嶺淳(一橋大学大学院教授)

演題:「食文化にみるナショナルな要因」

発表者:小澤智子

主催

移民研究会

日時:5月22日(土)13:00-14:50

場所:Zoom ミーティング

参加

スミソニアン協会と明治大学の共催講演

日時:5月25日(火)10:00-12:00

場所:Zoom ミーティング

参加

津田塾大学言語文化研究所、アメリカ文化研究会

日時:5月29日(土)14:00-16:00

場所:Zoom ミーティング

参加

アメリカ学会

日時:6月5日(土)9:00-17:10、6月6日(日)9:00-16:00

演題:年次大会

参加

JICA 学術プロジェクト(新)、第1回目の研究会

日時:2021年6月7日(月)15:00-17:40

場所:Zoom ミーティング

主催

Mobility & Morals 研究会、第1回

日時:2021年6月17日(木)15:00-18:15

場所:Zoom ミーティング

主催

Mobility & Morals 研究会、第2回

日時:2021年7月5日(月)15:00-17:20

場所:Zoom ミーティング

参加

明治維新史学会 例会

日時:2021年7月10日(土)15:00-17:30

会場:ZOOM ミーティング

主催

Mobility & Morals 研究会、第3回

日時:2021年7月12日(月)10:00-12:20

場所:Zoom ミーティング

口頭発表

津田塾大学言語文化研究所、アメリカ文化研究会

日時:7月17日(土)10:30-12:30

場所:Zoom ミーティング

演題:「食と『国際主義』——1940年代の日本YWCA機関誌の検証を中心に」

発表:小澤智子

参加

イメージ&ジェンダー研究会「今、ジェンダー論争をふりかえる」

日時:2021年7月18日(日)14:00-19:00

場所:Zoom ウェビナー

主催

Mobility & Morals 研究会、第4回

日時:2021年7月26日(月)15:00-17:00

場所:Zoom ミーティング

主催

Mobility & Morals 研究会、第5回「香川せつ子先生を囲んでの Zoom 会合」

日時:2021年8月2日(月)10:00-11:30

場所:Zoom ミーティング

主催

Mobility & Morals 研究会、第6回

日時:2021年8月4日(水)10:00-12:00

場所:Zoom ミーティング

主催

Mobility & Morals 研究会、第7回

日時:2021年8月9日(月)10:00-12:00

場所:Zoom ミーティング

主催

Mobility & Morals 研究会、第8回

日時:2021年8月13日(金)10:00-12:00

場所:Zoom ミーティング

主催

Mobility & Morals 研究会、第9回

日時:2021年8月16日(月)10:00-12:00

場所:Zoom ミーティング

主催

Mobility & Morals 研究会、第10回

日時:2021年8月21日(土)10:00-12:00

場所:Zoom ミーティング

主催

Mobility & Morals 研究会、第 11 回

日時:2021 年 8 月 23 日(月)15:00-17:00

場所:Zoom ミーティング

主催

Mobility & Morals 研究会、第 12 回

日時:2021 年 8 月 29 日(日)10:00-12:00

場所:Zoom ミーティング

主催、口頭発表

Mobility & Morals 研究会、第 13 回

日時:2021 年 9 月 6 日(月)10:00-12:00

場所:Zoom ミーティング

主催

移民研究会

日時: 2021 年 9 月 18 日(土)12:30-14:00

場所:Zoom ミーティング

主催

Mobility & Morals 研究会、第 14 回

日時:2021 年 9 月 20 日(月)10:00-12:45

場所:Zoom ミーティング

主催

Mobility & Morals 研究会、第 15 回

日時:2021 年 10 月 17 日(日)9:00-11:00

場所:Zoom ミーティング

主催

移民研究会

日時: 2021 年 10 月 16 日(土)10:30-12:00

場所:Zoom ミーティング

主催

Mobility & Morals 研究会、第 16 回

日時:2021 年 11 月 21 日(日)9:00-10:00

場所:Zoom ミーティング

主催

移民研究会

日時: 2021 年 11 月 27 日(土)10:30-12:00

場所:Zoom ミーティング

主催

移民研究会

日時: 2021 年 12 月 4 日(土)10:30-12:00

場所:Zoom ミーティング

参加

National Archives Museum 講演

日時:2021 年 12 月 8 日(水)13:00-14:00

場所:Youtube ライブ配信

参加

スミソニアン・明治共同博物館セミナー

日時:2021 年 12 月 13 日(月)20:00-21:00

場所:Zoom ミーティング

参加

National Archives Museum 講演

日時:2021 年 12 月 13 日(月)13:00-14:00

場所:Youtube ライブ配信

主催、口頭発表

Mobility & Morals 研究会、第 17 回

日時:2021 年 12 月 26 日(日)9:00-11:00

場所:Zoom ミーティング

内容:小澤のワシントン DC とフィラデルフィア調査の中間報告(1)

参加

National Museum of American History Tuesday Colloquium

日時: January 18, 2022, 4:00 PM

場所: Zoom ミーティング

主催、口頭発表

Mobility & Morals 研究会、第 18 回

日時: 2022 年 1 月 30 日(日)9:00-11:00

場所: Zoom ミーティング

内容: 小澤のワシントン DC とフィラデルフィア調査の中間報告(2)

参加

フルブライト会合 The Building International Partnerships Webinar

日時: Friday, February 4, 2022, from 2:30 PM-4:00 PM アメリカ東海岸時間

場所: Zoom ウェビナー

主催

Mobility & Morals 研究会、第 19 回

日時: 2022 年 2 月 20 日(日)9:00-11:00

場所: Zoom ミーティング

参加

Japanese American National Museum の Virtual Curator Preview & Gallery Talk—Sutra and Bible

日時: 2022 年 2 月 26 日(土)13:00-14:00 アメリカ東海岸時間

場所: Zoom ウェビナー

主催、口頭発表

Mobility & Morals 研究会、第 20 回

日時: 2022 年 2 月 27 日(日)9:00-10:00

場所: Zoom ミーティング

内容: 小澤のワシントン DC とフィラデルフィア調査の中間報告(3)

主催

Mobility & Morals 研究会、第 21 回

日時: 2022 年 3 月 13 日(日)9:00-11:00

場所: Zoom ミーティング

参加

Digital Museum of the History of Japanese in NY, Japan History Council of NY の "Japanese Eyes on America: 150 Years Since the Iwakura Mission to the U.S."

日時:2022年3月25日(金)7:00(アメリカ東海岸夏時間 March 24, 2022 18:00)

場所:Zoom ウェビナー

参加

Historic Annapolis の “The Quakers and the Birth of American Antislavery”

日時:2022年3月30日(水)8:00(アメリカ東海岸夏時間 March 29, 2022 19:00)

場所:Zoom ウェビナー

● 論文・研究ノート発表

論文

Tomoko Ozawa, "Charles Wirgman's Moving Images: Mobility Portrayed in Yokohama," *JICA Yokohama Journal of the Japanese Overseas Migration Museum* (March 2021): 1-25. 2021年4月刊行。

研究ノート

Tomoko Ozawa, "Locating Shipwrecked Persons in the Discussion to 'Open' Japan," *JICA Yokohama Journal of the Japanese Overseas Migration Museum* (March 2022): 105-129.

以上